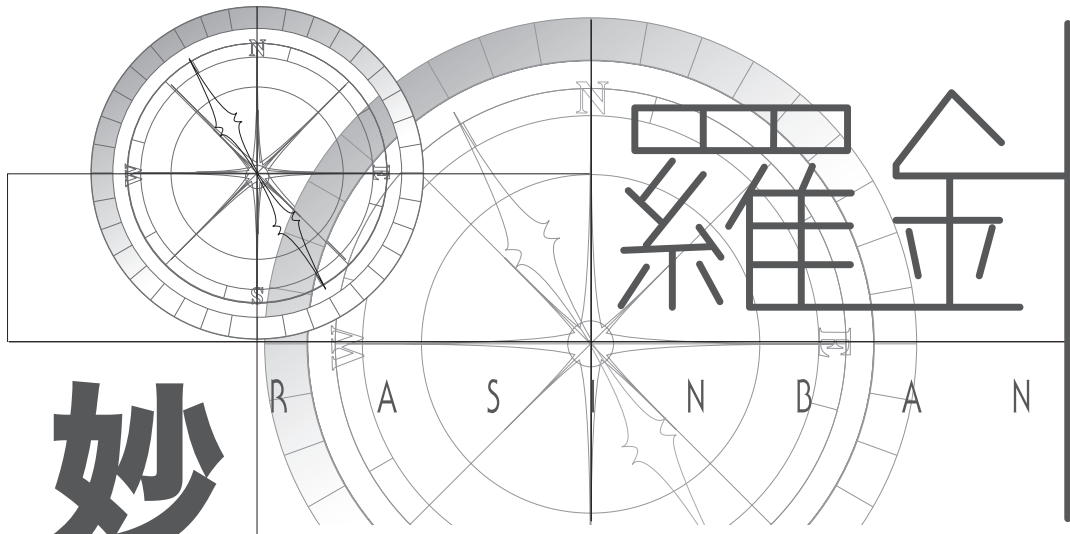


金住系 盤

COMPASS

発行所: 東京都豊島区南池袋
一丁目十三番十六号
日蓮正宗法道院法華講
03 (3984) 2650
[http:// www.hodoin.net](http://www.hodoin.net)



霊界が日常生活を支配しているという妄想

私たちがこの世に生を受けるためには、父と母の存在が不可欠です。また、父と母には、それぞれ祖父と祖母がおり、そのお陰で、この世に生を受けたこととなります。このように順を追って先祖をたどっていけば、ほんの数世代で天文学的な数字になります。そうすると、私たちには何百万、何千万人も先祖がいることになるわけですが、もし、その中のひとりでも欠ければ、現在の私たちは存在しないこととなります。このことは当たり前のように思えるかもしれませんが、実は大変なことなのです。なぜなら、私たちの存在それ自体が、何百万、何千万の人々の生身の生の積み重ねの上の結果に他ならないからです。そういう意味で先祖を有難く思い、恩を感じることは当然のことでもあります。また、それだけ多くの先祖が想定できるので、その中には色々な人がいたであろうことが想像できます。例えば、戦国時代に武士であったり、あるいは、野党、盗賊の仲間であったり、あるいは、金貸しで人を苦しめたり、あるいは、貧乏で、病気になることも医者にも診てもらえず亡くなったたりした先祖がいたかもしれません。おそらくは、それは、ありとあらゆる種類の人を想定しても大きな間違いとはいえないような巨大な人の群れなのです。

けれども、現代に生きている私たちは、それらの先祖の存在を背景に持ちながら、ひとりの人格として存在していることも事実です。さらに、私たちはそれぞれ良心を持ち、自分自身の行動は私たちの自由な意志の中にあります。怠けた結果、その報いを受けるのも私たち自身であり、努力の結果、報われるのも私たち自身なのです。

ところが、多くの新興宗教では、私たちの不幸

や苦しみは先祖の霊が苦しんでいるためであり、それを解決するためには先祖供養が不可欠だと説きます。さらにいえば、私たちの日常生活は霊界が支配していたり、霊界が現実生活に深く関わっていると言われます。妙智会の教祖・宮本ミツもその内のひとりです。しかし、これは大いなる間違いです。これまで述べてきたように、私たちの先祖をたどっていけば、巨大な人の群れにぶつかり、ありとあらゆる可能性の海に突き当たるとしかいいようがありません。ところが現実の私たちは、私たち自身の行動により、私たち自身の責任を全うするのです。

では、私たちと先祖との関係はどのように考えられるのでしょうか。

それは、私たちが今生きている人生を意義ある存在として生きていけるなら、それを存在させるために必要だった先祖の存在に意義を付与し、私たちが今生きている人生が無意味なものなら、先祖にとつて私たちの生はむなしものになるのではないのでしょうか。言い換えれば、先祖と私たちとの関係の意味は、私たち自身の中にすべてがあるということです。この命の根本を解き明かしたのが仏教なのですが、宮本ミツは仏教系在家教団を名乗りながら、仏教の基本すらわきまえていないようです。

何を指して霊と呼ぶのか

では、宮本ミツはどのような現象を指して霊の存在を信じるようになったのでしょうか。ミツは霊友会に入会した当初、「因縁を下げる」のをよく見たと語っています。

「はじめてだったものだからびっくりしてしまって、へいやあ、これはおっかない、なにものだろう? 狐か狸がやってんだな」と悪くってしまいい、狸がどっかに飼ってあるんだらうと思って、お

宮の中が見たくて」(宮本ミツ『道』)と狐や狸が憑依(ひょうい)した現象を目の当たりにした驚きを語っています。しかし、この現象はミツが妙智會を作ったからも表われ、「来る人来る人因縁をとると、来た人がみんな因縁(霊媒)になっちゃうんです。タヌキが出てきて腹鼓をうったり、ヘビが出てきて這い回ったりするんです」(同上)と語り、この種の憑依現象を動物霊だと解釈しています。

しかし、このような現象は、ミツが語るような動物霊などではありません。このような現象は、稲荷信仰や犬神信仰などの畜生を信仰の対象とした人々が、その獣と感応道交し、憑依したかのような異常な言動や行動を起こすもので、いわゆる「つきもの」と呼ばれる現象で、精神病理学でも多くの症例が報告されています。

多くの新興宗教がこれらの憑依現象を霊魂が存在する証明として用い布教に利用してきましたが、前述したように、現在の精神病理学では、これらの現象を憑依という概念でくくっています。では、仏法では、霊をどのように考えているのでしょうか。

仏法では、三世にわたる永遠の生命観を説き、色心(肉体と精神)は一如(一体で不可分な様子)であることが明かされて、特別な霊魂などが存在しないことを明示されています。すなわち、不幸や災害は、霊魂(悪霊)によってもたらされるのではなく、自らの心身両面にわたる行為の因果によって起こるのです。したがって、「霊魂」が独立した形をもって、人に災いをもたらしたり、子孫を護るなどの特別なはたらきを説く、「御霊信仰」や新興宗教などの霊魂説は、真実の生命論とかけ離れた迷信というべきなのです。

いわゆる在家仏教教団と称する多くの新興宗教では、この仏教の基本を理解しているところはほとんどありません。宮本ミツを教祖とする妙智會もこの例外ではありません。そのことを具体的に例証して

妙智會教団とは、どのような宗教か

みましょう。

「子どもの人身事故は、いたましいものである。子どもは、おおぜいの先祖を成仏させるための身がわりとなっている」(宮本ミツ「心に花を」)

ここでミツがいたいのは、先祖の霊を粗末にしているために、先祖が霊界で苦しんでいるというのです。そのため、子どもが人身事故にあつたのだから、妙智会による先祖供養をしなければならぬという論法に進んでいきます。

まさに、仏教の基本を知らぬ邪義を何のてらいもなく述べています。所詮、思いつきで始めた新興宗教では、仏教の基本すらわきまえていない姿を露呈するのも致し方ないことなのでしょう。しかし、問題は、このような誤った宗教が世に広まっており、多くの人を不幸に陥れているという現実なのです。

教祖になるつもり

人は何かを求めて信仰の道に入りますが、その動機は様々です。ある人は悩みを解決したいと願ひ、また、ある人は自分自身を高めたいとの願ひから信仰者となる場合もあるでしょう。しかし、それは、あくまでひとりの信仰者としてであつて、教祖(教団の創始者)になることを意味するものではありません。ところが宮本ミツは、ある時、突如教団を設立し、教祖となります。その足跡を具体的に見てみましょう。

ミツは大正六年十七歳で宮本孝平と結婚します。当時、孝平は仏立講の信者でしたので、ミツも仏立講の信者となります。ところが、夫の事業の失敗、ミツの重病が重なり、生活は困窮するようになります。昭和九年、ミツの兄の勧めにより、夫婦は共に仏立講を捨て、霊友会に入会することになります。二人は着物を質に入れたり、家財道具を売って信仰活動に専念し、孝平は昭和十一年の暮れには第七支部長に、翌年には常務理事に任命され、ミツも同年、本部勤めに抜擢されます。昭和二十年十一月十三

日、孝平は縁談をまとめた振舞酒を飲み、さらに二合ほどの祝い酒を手みやげに我が家に帰り上機嫌だったところ急に胃痛を訴え、七転八倒の苦しみの中、息を引き取ります。

昭和二十四年、霊友会会長、小谷キミの金塊・コカイン隠匿事件、翌年の麻薬事件などを機にミツは養子武保と次女の夫斉藤栄一らと相談の上、昭和二十五年八月二十五日に霊友会に脱会届を提出します。ところが、それから二か月後の十月十二日に渋谷区代々木に「宗教法人妙智會教団」の看板を掲げます。

誠に面妖なことですが、新興宗教・霊友会の信者だったミツが、その新興宗教をやめた途端に新たな新興宗教を作るといのはどういいう経緯なのでしょう。その鍵はミツが本部勤めをしている間に見た霊友会の浅薄な内実起因します。ですから、ある商店に勤めていた番頭がその商店をやめると同時に、独立して同じ商売を始めるように、霊友会をやめた途端、妙智會を作ることになったのです。そこには宗教の正邪や教えの高低、浅深(せんじん)を考察するよ

うな視点は見受けられません。当然、妙智會の教義は霊友会の受け売りとしてミツの思いつきを付け加えた出鱈目なものとなるのは必然という他ありません。その出鱈目さ加減を見てみましょう。

妙智會では、霊友会の受け売りとして教義の根本を法華経としています。ところがこの教団では、仏舍利を本尊としています。これは、法華経法師品に「復(また)舍利を安んずることを須(もち)いず」と禁じた行為なのです。まさに、法華経の精神を踏みにじる行為であることがよくわかります。さらに、教団では、三宝荒神(仏法僧を守護して悪人を罰するという神)を祀(まつ)っています。法華経には「三宝荒神を祀れ」とは説かれておらず、日蓮大聖人の御書のどこにもそのようなことは示されていません。三宝荒神などは民間信仰の籠(かまど)の神に過ぎないものですから、これもミツの思いつきからきた神なのでしょう。まったく、いい加減にも程があるというべき邪義なのです。

このように妙智會の説く教義は法華経とは似ても似つかぬ出鱈目のオンパレードなのです。

末法の仏様とは

仏教では末法という言葉がよく使われますが、末法とは、どういう時代を指す言葉なのでしょう。末法とは釈尊が亡くなられて後、二千年後の時代を意味する言葉なのです。末法の末とは、漢文では否定形として用いられ、末法とは、釈尊の法(白法)がなくなった時代、釈尊の法が効力を失った時代のことを指します。釈尊が入滅した後、二千年後、釈尊が説かれた教えに人々を救う力がなくなり、経巻のみがあるだけで、正しい修行も功德もなくなり、自然災害が多発し、不治の病が流行し、人々の間で争いの絶えない時代が訪れると経巻には説かれています。

では、末法に入り、釈尊の法が滅した後、どのような仏様が現れるのでしょうか。また、それは、一体、どの教典に説かれているのでしょうか。実は、そのことが釈尊の出世の本懐である法華経に説かれているのです。

釈尊は五十年間にわたり法を説きましたが、最後の八年間に自分自身がこの世に出現した一番の目的である最も重要な法を説かれました。その法こそが法華経だったのでした。

さて、法華経に説かれた末法の仏様についてですが、法華経には、どのように説かれているのでしょうか。

法華経には、その仏様は、末法に現れて法を説くが、ある時は、しばしば所を追われ、また、ある時は、時の権力者や出家在家の人々に迫害を受け、石を投げられ、杖で打たれ、あまつさえ、刀の難まで受けられながら、一切衆生を成仏に導き、幸せにする法を説いていくと説かれています。その仏様は、末法の衆生の闇を払い、人々が持っている尊い命を輝かせる大白法所持され、その法を説くために、いかなる難も忍ばれるのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を救うために、法華経に予証された通り、数多くの法難に遭いながら、唯一無二の法を説かれました。そのお振舞舞いは、まさに、法華経に説かれたそのまを身をもって行じられ、まさに、末法の仏様であることをその行動によって証明されたのです。

このことからわかるように、末法に生きる現代の私たちが信じるに足る正しい教えは、ただひとつしかなく、その教えを説かれた方は、末法の仏様である日蓮大聖人なのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華経を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七百五十年間にわたって現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院(池袋)で歓喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも真実の仏法と出会って、かけがえない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

